

一九五三

八月一日 土曜 曇ときどき雨

午後四時羽田着、科学史学会の田中・山崎の両君送りに来る。定刻六時SAS（スカンディナヴィア航空）にて立つ。八丈島付近へ来ている台風もたいした事はない。羽田を立つてからしばらくは雲が多かつたがそれでも富士山のシルエットがいつまでも見えた。一時間くらい飛んだら雲のない所へ出た。

午後十時二十分ごろ沖縄着、ここで五十分くらい留つた。あと八時間でバンコクに着くという。バンコクは天気がよいそうだ。この飛行機は座席が少ししか傾かない。隣が空いているから自由に使えと言つて、スチワードがしきりを下げる平らにしてくれたが、汽車の二人分の座席へ寝るようで具合がよくない。余り良く眠れなかつた。

八月二日 日曜 晴

七時三十分バンコック着、現地時間では五時三十分、ここで朝食。ドンムアンという飛行場である。タイの文字が目についたので手帳へ写したところ、何とそれは「殿方」と「婦人」というのであつた。

タイ時間の六時四十分バンコック発。水田が見える。十一時カルカッタ着。レストランへ案内があつたが、そこへは行かず待合室に腰をかけていた。昨夜より眠れなかつたので疲れている。やがて出発、機内でランチが出たが何も食べない。うとうと眠くなつて来た。午後三時カラチへ着いたときは気分がだいぶ良くなつていた。レストランでジュースを呑む。四時カラチ発。下を見ると地面の様子が変つて来た。それを見ながら眠りに落ちた。

イスラエル時間の午後十時四十分リッダ着。イスラエル時間は東京より七時間若く、モスコーと同じである。空港ホテルへ泊ることにして部屋へ入つたら十時半だつた。すぐには眠れないで、SASでくれたパンフレットを開いてみると、サービスについて意見を寄せて貰いたいとあって、封筒が添えてある。そこで座席がもう少し傾くようにした方が良いと書く。飛行機のついた絵はがきはうちへの便りに使つた。

八月三日 月曜 晴

空港ホテルはさすがに騒々しくて、昨夜はなかなかねつかれなかつた。目がさめたので時計を見たら朝の五時だつた。まもなく窓が明るくなつた。六時少し過ぎ起きて、七時を少し回つたころ下のレストランで食事。昨夜書いたはがきを出そうと思つて、切手を売る所をさがしたら、売店でわれわれのコングレスの記念切手を売り出したところであつた。切手は一一〇ルプタでマイモニデスの肖像がついている。Day of issueという記念封筒をくれた。日本へ出す航空便のはがきはこの切手一枚はればよいという。

ルプタというのはイスラエル・ポンドの一〇〇〇分の一である。昨夜ドルを換えてもらつたら一ドルが一・七九三ポンド(エー)の割りだつた。ホテルの部屋代は二・八 ポンド。五〇ドル両替えを頼んだら、多過ぎませんかと注意してくれたから、コングレスで二週間ばかり滞在しますと言うなずいてイスラエルの金にしてくれた。

リッダの空港からイエルサレムへ行くにはタクシーしかない。九時半ごろリッダを立つ。途中で運転手がここはコロニーだと、ニキロ先はアラブだとか説明してくれる。つまりヨルダンとの国境線からニキロの所を通つたわけだ。国境線ではショッちゅう小競合があるそうだ。

十時半ごろコングレスの事務所のあるホテル・キング・ダヴィドへ着いた。事務所で到着の署名をして、いろいろの印刷物を一袋貰う。宿は二級くらいのを頼んで置いたらオルギルというホテルが割り当てられていた。先刻乗つて来たタクシーでそのホテルへ行く。

コングレス事務所でタクシーにいくら払つたかきくから十五ポンドと答えたら、まあそんなもんだという顔つきだつた。ていねいにチェックしてくれたのだ。それから二時半に市内見物の迎えの自動車がホテルへ行くと、教えてくれた。それまでホテルで休息。

迎え車でオランダのフォルグラフ教授(*1)とトルコのサイリ君(*2)と一緒にになつた。二人とも同じ宿であつた。教授もこのホテルかと急に気が大きくなつた。コングレスの幹部はキング・ダヴィドへ陣取つているらしい。途中で他の車と合流し、オランダで世話になつたセルジエスク教授(*3)および夫人と再

会を喜んだ。胸に名札をつけているものだから、サートン（*4）が自分を見つけて、先方からヤジマかと声をかけられた。一九五〇年以来、アカデミーの機関誌に報告を出したりしていたから、自分の名を覚えてくれたのであろう。

『* 注は最後に一括して掲げる。』

それからシオンの山へ登った。その礼拝堂だとか、マリアさまのお亡くなりになつた所、ダヴィド王の墓など見た。聖書に精しい人なら隨喜の滂を流しておろがむ所であろうが、自分には猫に小判で、それよりもセルジエスクやサートンと話をする方が大切であつた。

次にイスラエルの国会クネセツトへ案内され、議事堂の中を見た。傍聴席の前を通ると私の方を見てヤーパン・ヤーパンと珍らしがる人がいた。こつち戦争に負けて一人前になつた日本人だぞというような気持ちで大きな顔をして歩いた。もつとも先方は単に好奇心をそそられただけで、それ以上ではないという様子であつた。

そこを出たところでボーデンハイマー教授（*5）および夫人に会う。教授から明日の総会で二分か三分何か話せという。日本が初めて科学史の国際会議に参加したのと、遠方からはるばる来たのだから、と言う。承知した。教授は今度の会議の組織委員長である。

六時ごろ宿へ帰る。少し疲れた。七時ごろ宿で食事をして、明日総会でしゃべることを考え、十時ごろねる。

八月四日 火曜

昨夜はよく眠つた。目がさめたら朝の六時だつた。窓を開けると涼しい風が吹いている。昨夜は少し暑かつた。うちにいるのと同じくらいのような感じだつた。プログラムを見ると今日の午後四時から開会式で、午前中市内見物があると書いてある。昨日は迎えが来たから今日も来るかと思つたが、なかなか来ない。そこでプログラムと講演要旨を読み出したら結構時間がかかり、見物などどうでもよくなつた。昼までかかつても読みきれない。

午後はこの土地の人のようにゆつくりとシエストをして、Y M C A でおこなわれる開会式へ行く。初めにボーデンハイマーが開会の辞をヘブライ語と英語とフ

ランス語で述べた。次に科学史アカデミーの常任幹事セルジエスクが「国際科学史アカデミーの二十五年」という演説をした。一九二八年オスロで歴史学の国際会議が開かれたとき国際科学史委員会が発足したのであるから、ちょうど二十五年になるわけだ。そのあと各国代表の短いスピーチがあつて、三番目くらいに自分が指名された。そのあとサートンほか四、五人しゃべつた。最後にイスラエル文部大臣の少々長いスピーチがあつて開会式を終つた。

会場には日本の旗も飾つてあつたが、何とそれは後光のさした軍艦旗であつたのは、戦争を放棄したはずの日本にとつては何とも皮肉であつた。しかし先方は皮肉のつもりでないことは分つている。

会場を出たところで日本婦人に声をかけられた。ミセス・T・カウフマンという人だつた。昨日ボーデンハイマー夫人が主人の助手にトーラという日本人がいますよ、と言つていた人である。昆虫学をやつているよし。津田塾を出てから上海にいたことがあり、國を出てから十四年、イスラエルへ来てから四、五年になるという。日本へ帰りたいような素振りであつた。この人と話ながらコングレス事務所へ行つてみる。六日一五時からコリドールの見学があるので申込みをする。

帰りにぶらぶら歩いていると本屋があつたので入つてみる。エブルー・フレンセの辞書があつた。イスラエル行が定つてからオックスフォードの「ヘブライ語文法」を少し読んだが、まだアルファベットも覚束ない状態だが、好機逸すべからずと思い買うことにした。宿へ帰つてフロントでアルファベットの筆記体を辞書の見出しの所へ書き込むことを頼む。何かの用にもと持参した日本の絵はがきをその男に進呈した。そばにいた同僚が私も欲しいというのでその人にもブレゼントした。

一一・〇から公式レセップションが開かれるスポーツ・クラブという所へ行く。外務大臣が英語とフランス語で挨拶を述べ、サートンがフランス語で謝辞を述べた。大勢の人から話しかけられた。宿へ帰つたのは十一時に近かつた。

『ももんが』一九九一年一月号

一九五三

八月五日 水曜

六時半ごろ目がさめたが七時半ごろ起きる。朝食は昨日と全く同じなのには少しうんざりする。しかし腹がへつて来たので昨日よりもよく食べられた。またオリーブの実がついていた。

八時半宿を出てすぐ近くにあるラティスピボンという僧院へ行く。ここが第一部（数学・物理・天文・地質・鉱物の歴史）の會場になつてているのである。九時開会、座長はバルセロナのミリアス・バリクロサ教授（*6）であった。最初の講演はイギリスのステーブルトン（*7）で鍊金術。次はアメリカのギンスブルグの予定であつたが來ていないので、私が二番目になつた。

私は数学史専門ではないけれども、一九五〇年の大みそかに亡くなつた三上義夫博士について話すのが適當と考え、そういう題を通告しておいた。座長から二〇分もらつたのでそのつもりでしゃべり、幸いサー・トンが出席していたので戦時中どういうルートでか聞きもらしたが、サー・トンから廣島の三上博士の所へ贈物が来たことを大矢眞一君からきいていたので、その礼も述べた。サー・トンは大きくなずいて聞いていた。業績については精しく述べるわけには行かないでの、大矢君が作つた論文目録をフランス語に訳したのを用意して來たから、それを提出することにした。

話が終つたときサー・トンが一言といつて立ちあがり、彼のパーソナリティには特長がある、お寺に住んでいて長い手紙をくれたがヴェリ・ディフィカルトだ、精しい伝記がほしいなどと述べられた。

自分のあとはフランスのコイレ（*8）で、ボナヴェンチュラ・カヴァリエリのことを話した。那次はイスラエルのヘヴェシ（*9）。この人はプログラムでは明日のはずであるが、コレイの話と関係があるので、ここへ移されたらしい。そのあと長い討論があつた。次がタント（*10）でシルヴェスト・フランソワ・ラクロワという数学者のこと話をした。これで午前の部は終り。

午前の休憩のときコイレに「あなたのコペルニクスの本を拝見しました」と言つたらおうように「トレ・コンタン」と答え、日本のクキは私の生徒でしたとつけ加えた。これは「いきの構造」の著者九鬼周造と解せられる。

街へ出て「クイック・ランチ」という英語の看板の出ている小さな店で晝食。それから宿へ帰り、一休みしたあと稻沼君へイスラエル第一報を書く。今日の午前の部会までざつと書いた。

三時半からYMC Aでジェネラル・セションがある。これは部会に分れない一般問題の講演と討論の会である。サー・トンが「科学対ヒュマニティー科学の歴史」についてかなり長い講演をフランス語で述べた。そのあとミリアス・バリクロサ、セルジエスクほか、数人の討論があつた。その最中にうしろから「矢島さんですか」と日本語で話しかける人がいた。振り向くと医科のAというものがテル・アヴィヴからここへ来たら、あなたのことをきいて訪ねて来たという。全く知らない人である。まだ討論が終つていなかから、あとで時間があつたら會いましょうと言つて帰つてもらつた。公開講演だから誰でも入れるのだが、ただ同國人というだけで余計なことをしてくれたものだ。迷惑至極である。

宿へ帰つて、休息。また午後九時からレウベニ教会というののレセップションに出席。演説が多くうんざりする。それが終るとダンスが始まつたので、そつと抜け出して宿へ帰る。十一時を少し過ぎていた。Aという人が置手紙をして行つた。泊つているホテルまで書いてある。「丁寧なことである。

八月六日 木曜

エデン・ホテルへ寄つてA氏へ挨拶する。奥方まで出て来て何やら話しかけるから、これから学会が始まりますのでと言つて辞去する。今日の第一部会はサートンが座長で、サムブル斯基（*11）、トンヌラ（*12）、テミリアス・バリクロサ、ヴィリュー・レイモン（*13）、ドーマ（*14）、コスタベル（*15）、ロンキ（*16）と七人の発表があつた。

サンブル斯基（ヘブライ大学）はストア学派の宇宙における力学的觀念、マダム・トンヌラ（パリ大学）は十七世紀から二十世紀に至る力の觀念の發展、マダム・ヴィリュー・レイモン（スウィス）は原子論の歴史、ロンキ（フィレンツェ）はアルハーゼンの光学について述べた。ヴィリュー・レイモンの講演のあとでアト

ミスムはインドにもありますねと言つたら、インドは調べてないと答えた。彼女はアーノルド・レイモン教授のお嬢さんであることが分かつた。

昨日と同じ店で晝食をとる。するとあんたの写真が出ているよ、と言つてイスラエル・ポストという英字新聞をくれた人がいた。宿へ帰つて休んでいると、イスラエル放送局のハレルという人が訪ねて來た。実は昨日電話をかけて來たのだが、今日會うこととしたのである。日本語を勉強しているので發音を直してくれと言うのだ。小一時間つきあつて帰つてもらう。三時からコリドールの見学がある。これは希望者だけのものだが申込んでおいたのである。ホテル・キング・ダヴィドの前に集合し、二台の小型バスでコロニーを見て回つた。イスラエルという國ができたので各地に散在していたユダヤ人が帰つて来て、急に人口がふくらあがつた。いわゆるアブソープションである。そこで簡易住宅の急造が始まつたのである。見学を終つて宿へ帰つたのは七時であつた。今朝ホテル・キング・ダヴィドの屋上に日の丸の旗があがつていたのを確認した。

夕食後ジューイッシュ・エージェンシーという所へイスラエル紹介の映画を見に行く。ネゲブ沙漠の開発の状況をフィルムに収めたものが主であつた。シントウのことを研究しているというこの國の人にはしきられられたが、これにはうまく答えられなくて弱つた。またそこへ行く道でイタリアのロンキ氏に逢つた。クボタという日本人を知つていて、と言つていた。光学の久保田広氏であろう。宿へ帰つたのは十一時少し前であつた。

今朝の部会のときテル・アヴィヴのレイテルという人が三上さんの論文リストを見せてくれないかといつたので、ひかえのコピーを一、三日ということで貸した。

八月七日 金曜

イスラエルへ来てから天気のことを書かなくなつたのは毎日はれだからである。雲も少い。立つ前に湯浅光朝君に八月のイエルサレムの天候について調べてもらつた資料の中に雲量は平均で \sim となつていた。その通りである。気温はかなり高くなるが乾いているので暑さを余り感じない。

今朝六時に起された。ベールシェバへエクスカーションの日だ。六時半食事、七時十五分コングレス事務所へ行く。大型バス一台で参加者は五十人と六十人の間くらいだつた。初め西へ向つて走り、やがてレホヴォトという所に着き、ワイ

ツマン（* 17）研究所を見る。

それからさらに西へ向かつてしばらく走った。みちみち案内人の説明があつたが余り覚えていない。ただあれがガザの町だというのはよく覚えている。ガザはエジプト領なので遠望しただけである。そこから少し東南へ方向を変えた。やがて羊の群れを追っているベドワイン人の姿や、ラクダが見えて来た。タトンが「シヤモー、シヤモー」と叫んで珍しがり「フォト、フォト」と言つて運転手に車を止めてもらい写真をとつていた。かなり距離があるのでうまくは写らないと思つたが、私も車の中から一、二枚写した。

一時少し過ぎベールシェバ（* 18）へ着いた。ここは沙漠の町である。イエルサレムから一六 キロという。ここで晝食になつた。レストランの食卓でマダム・トンヌラと隣り合せになつた。彼女には奇妙な癖がある。話をしながらパンのミをちぎつて團子を作るのである。それを五つか六つ食卓の上へ並べたものである。彼女は「マダム・ユカワはダンスが上手なの？」という質問を私にあびせかけた。日本舞踊の名取です、というのを何と訳したらよいのか分らないので、そうだと人が言います、という積りで、「オン・ディ」で片づけた。

二時過ぎふたたび車に乗り込む。食事のあいだ日射を受けていた座席は尻がこげるかと思うくらく熱くなつていた。そこから少し南へ言つてネゲブの沙漠を眺望して引返した。返りは疲れて居眠りが出そうになつた。七時少し前イエルサレムへ帰る。夕食をすませるとすぐにねてしまつた。

八月七日 土曜

今日はサバス（安息日）で朝食はコーヒーも出なかつた。

ニーダム（* 19）が一般部会で「一科学技術史における中國と西方との関係」という報告をすることになつてゐる。そのあとの討論で発言することを通告しておいたので、何をいおうかベッドの上へねこんで考える。彼とは會議の前から文通があり、先日ちょっと顔を合せてゐる。午後までかかつて洋紙一枚にフランス語で草案を書く。

方々から貰つたパンフレットや地図など眺めて安息日を過した。コングレスの案内書に安息日には商店・カフェ・バスは休み、タクシーは動くとあるが、タクシーで出かけるほどの気力はない。夕食のあとトルコのサイリ君とだいぶ話した。

彼は井戸の中から星を観察することに興味を持つてゐるそうで、日本にそういう資料があつたら知らせてほしいと言わたが、日本にそういう方法があつたかどうか、私は知らない。それから「日本の人口は八千万か。」「然り、もう少しあるかな。」「トルコは一千二百万だ、日本には工業力があるがトルコにはない。」ざつとこんな話をした。

コングレスの案内に、ヨルダン政府に交渉してイエルサレム旧都市にある聖所を九日午前見学予定とあつたが、これは許可されなかつたよし。

五日に一般部会でユネスコのギュイ・ドゥ・メトロー氏に声をかけられた。一九五〇年にアムステルダムで會つたコルテザン氏から話があつて、ユネスコの「人類の歴史」の協力委員になつていたので、自分の名札を見つけて声をかけたのである。氏はこれからギリシアの方へ回つて二週間後パリへ戻るから、もしご都合よろしければパリで会いましょうと言つた。それは講演が始まる直前であつたから、それ以上話している時間がなかつた。今日ゆつくり休んでいる間にメトロー氏に會つたことを思い出した。

八月九日　日曜

事務所へ行つて十一日からのエクスカーションの費用を拂う。事務所でチュニスのベン・ヤフヤ君（*20）と少し話をした。彼は薬学の歴史をやつてゐるそうだ。今日の午前に予定されていたアラブ地区の見学は不許可になつたので、四日の午前の見物に行きそこなつた所を見ることを思いついた。そのコースはベトルヘムと死海が望見できる所まで行くと案内書に出ていた。そこへ行つて見たくなり事務所のフルトン氏に話すと、ツーリスト・サービスへ電話をかけてくれた。そういう希望者が他にもいるので今日の午後案内するという。

事務所の掲示場に「沙漠征服」の展覧会というのが一〇・三〇から開会と出でいたので行つてみる。まだ準備中であつた。前にも話しかけて来たことのある夫妻に會う。プラヴェルマンといつた。出席予定者名簿に出ていないから臨時の参加者であろう。その夫婦の車へ乗せてもらつた。

いつもの小さな食堂で晝食。ベトルヘムと死海望見のもう一人の希望者はイギリストのデイングル氏（*21）で、しかも自分と同じ宿なのに今まで気がつかなかつた。二時半にツーリスト・サービスへデイングル氏と一緒に行く。同じ希

望者が合計六人おり、小型バスで出発。ベトナムの見える所で写真を一枚とつた。死海も見えた。それからヘルツル（*22）の墓というのを見て六時宿へ帰る。

今日十一時ごろ外務省から電話があつたので午後七時ごろなら宿にいる旨答えておいた。丁度七時見えた。東京のイスラエル大使館員ギヴォン氏からミスター・ヤジマがコングレスでそちらへ行くから見舞つてくれという連絡が入つていたところで、何か不自由はないかと言う。まことに有難いことだ。何も不自由はないと答えると、それは結構です、ギヴォン氏は日本語を勉強中だから、お帰りになつたら彼の日本語をテストしてやるといい、など言つて帰つて行つた。

東京を立つ前にイスラエル大使館へ行つたとき、コングレスへの参加申込はこちらで取りついでやりますと言つた館員がギヴォン氏であつた。参加費は一〇ドルであつたから当時の固定相場で三千六百円である。百円札を三十六枚差出した枚数をかぞえてから、これでよいと言つて一枚返してくれたことまで思い出した。夜分わざわざ訪ねてくれた外務省の役人の名を聞きもらしたのは悪いことをした。

八月十日 月曜

今日は第一部会はないので第五部会（一般科学史・科学史の方法など）へ顔を出す。カナダのクリバンスキー（*23）が座長であった。同氏とはベールシェバへ行くバスの中で少し話をした。日本のアベを知つていると言うからヨシシゲかと聞き返したら、そうだと言つたようと思つたが、バスの騒音のためはつきりしなかつた。しかし哲学でアベといえば安倍能成であろう。

講演はピネス（*24）、セルジエスクなど、座長がサーティンに代つてクリバンスキーの発表とつづいた。われわれは学校にあるような長机を前にして腰をかけた。前の列にマダム・ヴィリリュウ・レーモンが居り、その隣りにレイモン教授（*25）がいた。そこで講演者の交替する時間に、あなたの「グレコ・ロマン時代の科学史」をおもしろく拝見しました、と紙片に書いて教授に渡してくれるようマダムに渡した。すると彼女はすぐに「フランス語を読んだのですか」と問い合わせ返すから、そうですと答えると満足そうにパパに伝言してくれた。教授からは名刺に「書付有難う、お知合いになれて喜ばしい」と書いたのが返つて来た。

そのあと二人か三人の講演があつて午前の部を終つた。町で食事をして宿へ帰

つて休む。午後の會は三時半からだから、ミュゼー・ベザレルというのへ行つてみたら、一〇一三時開館となつてゐる。また宿へ帰るのも面倒だから町の喫茶店へ入る。三時半YMC Aの會場へ行く。二ーダムが中國科学技術史の計畫について約一時間しゃべつた。それから討論に移る。ボーデンハイマーに自分も少ししゃべると通告しておいたので、三人目くらいに名を呼ばれた。日本にも中國科学技術史の研究者はいるが、君の大著を早く見たいものだというようなことをフランス語でしゃべつた。儀礼的なことはこの言葉の方が便利のようだ。そのあともう一人あつて、それからサー・トン。最後に二ーダムが答えた。

夜ツーアーリンブ・クラブという所でレセッブションがあり、古代史と考古学の話がスライド入りでおこなわれた。同宿の仲間やそのほか顔見知りになつた人たちと一緒にだつたが、十一時になつたので一人でさきに宿へ帰つてねた。

八月十一日 火曜

朝コングレス事務所に特設の銀行へ行く。金を換えて階段を下りる所でステーブルトンとぱつたり會つた。彼が「ノー・マニー?」と大きな声をかけた。一昨日同じ所で會つたので、もう金がなくなつたのか、という調子であつた。仲々ひょきんな人である。それからラティスボンの第一部会へ行く。デイングル氏の話が始まつていた。そのあと討論が長くて十時半ごろまで続いた。そのあとでサー・トンが「イエルサレム・ポスト」の学生のプロテストのことについて話した。実はわれわれの泊まつてゐる宿へも「急用」と書いた大きな封筒が届けられた。何やら國際科学史會議に抗議するというような書類が入つてゐた。精しく読んでゐる暇もなかつたが、サー・トンが学生たちに応待した模様で、その報告がなされたのである。

そのあとローザンヌのレイモン教授の論文をお嬢さんであるヴィリュウ夫人が読んだ。教授はそばで見ていた。教授は声が立たないのである。終つたら十一時で、少し休憩することになつたので外へ出る。先だつてベザレル博物館というのを見ようとしたら時間の都合がわるくて見られなかつたので、そこへ行くことにした。科学者の肖像画や写眞の特別陳列があつた。これはコングレスのためのものであろう。常設の方も一応見た。

十二時そこを出る。町で食事をする。万年筆のインクがなくなつたのを思い出してインクを買う。宿へ帰つて、ふたを開けようとしたがどうしても開かない。しばらく晝寝をして二時二十分ごろ出かけ、さつきインクを買った店でふたを開

けてもらおうと思つたが、まだ店がしまつていた。憤れない自分の晝寝の時間が短か過ぎたのである。コングレス事務所へ行つて開會式のときの写真を受取る。今朝買ったインク瓶を新聞紙に包んで持つていた手がインクで汚れているのに気がついた。新聞紙の包みを開けてみるとインクがにじみ出している。外を持ち歩いていたので、暑さでインクが膨張したのである。おかげでふたが開き万年筆にインクを入れることができた。

一五時からアカデミーの總会があるのでY M C Aへ行く。次の会すなわち一九五六年の会議はイタリアで開くことが定つた。アカデミーの会長にはボーデンハイマー。總會は三十分くらいで終つた。一六時からユニオン（科学史連合）の總會があるが、その間の休みの時に事務所へ行つてフルトン氏に帰りの飛行機のことを依頼する。座席の指定は木曜日（十四日）にハイファでやつてくれるとう。

一六時ユニオンの總会に出る。ユニオンの新しい会長にはドウ・ブロイ、副会長にミリアス・バリクロサが推薦された。そのほか會計報告、前会長の挨拶などがあり、クリバンスキーが今度の会議の「レゾリューション」というのを読みあげて採択された。科学哲学との協同の件は案どおり決定。ミリアス・バリクロサの挨拶はスペイン語であったが、その中でイエルシャライムの所で盛んな拍子が起つた。それはこれがヘブライ語の発言だからである。閉會の辞はボーデンハイマー。

昨夜ツアリング・クラブのレセプションの帰りに、この國の会員と道連れになり、その人が宿まで送つてくれた。その途中でイエルサレムの本来の発音は何かときいたらイエルシャライムだと教えてくれたのである。イスラエルはイスラエルのよし、イスラエルというのは英語よみらしい。昨夜の帰りみちでもう一人、ヘブライ大学の地質学教授と少し話をした。その人がコバヤシという日本の地質学者と會議で會つたことがあると言つた。

二〇時からキング・ダヴィードで晩餐會があつた。顔見知りになつたブラー・ベルマン夫妻、それにロシュワルド夫妻と一緒に丸テーブルについた。ロシュワルドさんは討論のあとアブストラクトを集めていた人だ。ボーデンハイマーとサントンの挨拶があつた。それからレーネル・ラヴァースティンというお医者さんがスピーチをした。何だか面白そうだが、残念ながらよく分からなかつた。二二時ごろ終る。明日は朝早くエクスカーションに出かけるので、宿の勘定をすませ

てすぐねる。

八月十二日 水曜

六時に起こされた。七時半出発予定である。出発間際に東龍太郎氏に會う。昨夜九時に着き今夜立つよし。七時半にバスが来た。キング・ダヴィドへ寄つて大勢乗り込む。大勢といつても全部で三十人くらいであろうか。「AINシユタインの森」という所はコリドールの見学のとき通つた道だ。ここへ木を植えたのは一九二六年のよし。もうだいぶ大きくなっている。リッダを通る。ヘブライ名はロツドのよし。その前にラムレ(*26)でアラブの廃墟を見る。ここで写真をとつた。

十二時近くテル・アヴィヴへ着いた。ここは古い町ヤツファに続けてその北へ海岸沿いに建てられた近代都市で、イスラエル最大のモダーンな都市である。ヤツファの古名はヨツバというよし。二時ごろナタニアへ着いた。ここで晝食、それはイエルサレムの食事よりずっとうまかった。オランダのロゼボーム(*27)と同じテーブルだったので挨拶したら、彼女があなたは三年前にオランダへ來ましたね、知つてますよ、というようなことを言つた。ステープルトンも同じテーブルだつた。彼は煙草に火をつけようとしたが屋外で風があるから仲々つかない。私はコップを起こしてそのとば口でマッチを擦り、コップの中へ火のついた軸木を挿し込んで差し出した。彼はローゼボームの方を向いて「ヒー・イズ・ア・クレヴァ・マン」と言つた。すると彼女が「そりや、はるばる遠方から代表でいらした方ですもの」と言つたようだつた。ローゼボームはオランダでよく見かける婦人のようにかなり太目である。ここへ着く少し前だつたと思うが、彼女は腕をバスの窓から外へ出していた。バスが何かの角を回るとき木の枝がバスの窓を叩いた。彼女の太い腕も叩かれた。そのあと誰かが血が出ていますよ、と注意すると彼女はちつとも感じませんでしたわ、と答えた。血液もだいぶ余分にたまつてゐるらしい。

それからもう一人ライテルという人が同じテーブルだつた。よく写真をとる人でムーヴィで写していた。学会へ來たのか、見物に來たのか疑わしい感じだ。お医者らしい。アメリカのグループで來た人だがドイツなまりがある。このあいだ日曜日のエクスカーションでも一緒になつた人だ。

ナタニアの次はカエサレア(*28)でバスを降り、十字軍の遺跡を見た。海

岸へ静かな波が打ち寄せていた。写真を数枚うつす。ここからさらに北上してハイファへ向つた。やがてカルメル山が見えて來た。そのあたりで汽車が走つているのを見た。イスラエルへ来てはじめてのことである。六時ハイファ着、ダフネという宿が割当てられた。ここにシャワーは湯が出た。夕食後ちょっと外へ出見る。エルサレムよりは余程近代的な都市である。

『ももんが』一九九一年三月号

一九五三

八月十三日 木曜

ゆうべは少し暑かつた。エルサレムよりも暑い感じだ。今日の午前はハイファとその近辺のエクスカーションの予定になつていて。まずハイファの目抜き通りから港の方へ行き、それから北上してアーケル（*29）を通り、ナハリアまで行つた。アーケルは十字軍の歴史に名高く、ナハリアはドイツ人の町である。ナハリアの海岸から北の方に白い断崖が見えた。地図にテュレの梯子（*30）と出でている所である。そこはもうレバノン領である。

そこから引返してハイファへ戻り、考古学博物館を見る。先日第一部会で発表をおこなつたヘヴェシー氏が出て来て説明した。ここに勤務している人らしい。先日の発表のとき私が前の方で聞いていたのを彼は記憶していて、先日は私の話を「リッシュン」して下さつて有難うと言つた。ギリシアやローマふうの彫刻、キリストの壺などを見る。アンティコルスキーニという人の大理石の彫刻で、縛られたキリストは素足に草履のようなものをはいていた。日本と同じように親指と第二指の間にひもを通していった。帰りのバスの中からバハイのペルシア庭園というのを眺めた。

十二時少し過ぎ宿へ戻る。疲れて眠つていたら電話で食事に呼ばれた。食堂へ行つたらセルジエスク夫妻しかいない。他の連中はとうに済ませてしまつたらしい。私が顔を出さないので夫妻が私を呼ばせてくれたのだ。セルジエスク夫人が具合でもわるいのかと思ったと言われるから、疲れて眠つてしまつましたと答え。教授はやがて晝寝に自室へ戻り、夫人は私が取残されて一人食事をする間ずっとついていて呉れた一人で食べるのはディザグレアーブルだから、と言われた。

四時ごろまで休み、それからまた見物があるはず。バスを待つ間にセルジエスク教授が赤い蛇腹のついた超古典的カメラを出して私を写した（*31）。バスはカルナル山へ登りキュー・ポラのある教会を見る。厨子のような所にキリストを抱いたマリアさまの大きな像があり、その下が洞窟になつていて。預言者エリーの

洞窟というよし。ハイファの町を眼下に見ながら迂回した路を通つて山を下り、テクニオンというテクニカル・インスティテュトへ行く。

ここでサートンとフォーブス(*32)が名誉会員に推薦される長たらしい儀式があつた。そのあとガーデン・パーティというのが開かれた。東洋人が珍らしいのか、いろいろの人が挨拶に来た。多分この町の名流婦人でもあろうか「お若いプロフェッサーですこと」などとお世辞を言うから、もう五十で相当グレーですよと報いてやつた。七時半ごろやつと解放され八時ごろ宿へたどりついた。

同じ宿へ泊つたのはセルジエスク夫妻、タトン夫妻、ステーブルトン、化学のペーテル、それにマダム・プロックなど。この人たちは昨夜から一緒であつたが、今夜シモン(*33)という金髪でよくしゃべる男が加わつた。会議でヘブライの医学について話した青年だ。彼は先日コングレスの出席者の写真をとるとき、私がサートンやセルジエスクに勧められて最前列に立ぼうとしたとき、何やはつきり聞きとれなかつたが、冷笑の言葉を放つた男だから覚えている。それはかなりひどい悪口であつたらしい、というのは彼の周りの人たちが彼をたしなめることを言つたらしく、それに対しても彼は「あいつフランス語は分かるまいよ」と言つたものである。

八月十四日 金曜

一昨日も昨日もこの國では珍らしく雲が多かつた。今朝は雲がなくて暑くなりそうだ。今日はガリレア湖へ行く日である。六時に起され、七時食事、七時半には出発だ。最初にバスが止まつたのはナハラルという所だつた。小さなクラブのような所でこの村の説明をきき、ジュー・スと葡萄のごちそうになる。ブラー・ヴェルマン夫妻はこの村に住んでいるのだそうだ。小さな紅い実がなつていて木があるので案内人のヨーゼフ・ノイラート君にきいたらベッパーだという。こしょうの木である。道ばたのシャボテンに実がなつていて。キウリの頭を虫が食つたような形をしている。イエルサレムの町で売つていたのはこれであつた。昨日アラブの市場を通つたとき、サートンはそれを売つている女が皮をむいてくれるのを食つていた。会話は聞きとれなかつたが彼はアラビア語を使つたのであろう。私も実験してみようかと思つたが、腹でも痛くすると困るからやめた。今日はサートンの姿は見えないようだ。

夾竹桃によく似た花が咲いている。朝顔も咲いている。もう朝でもないのだが、イスラエルの朝顔は晝でもしほまないのだろうか。

晝顔ではなさそうだ。それからバルフォア森林という所を通った。そこからエスドラレオンの谷を見下ろす所で写眞を一枚うつした。ギルボアという山が見えて水を運んでいた。受胎告知教会、聖ヨゼフ教会、博物館を見る。博物館には古代のコインがあったが、ゆつくり見ている暇はない。古錢学（ヌミヅマティク）というのは骨董屋の仕事かなにかのようと思つたことがあつたが、どうしてどうして歴史学の重要な一部門であることを近頃になつてやつと気づいた。

ここを出てからしばらくして雨がパラパラと降つて來た。今朝ハイファでは雲の影も見えなかつたのでこの雨は珍らしかつた。しかしそれもすぐに通り抜けてしまつた。畠の中に石を積んだのが所々にある。ドルメンの類だらうか。實に小さな馬がいる。それに人が乗つてゐるのは可愛そうみたいだ。所々にキブツと呼ばれるコロニーがある。小さいのはナマコ板五枚に七枚くらいの大きさである。もう少し大きいものある。

やがて世界中で一番低い所という標識が見えた。数字は忘れたが地中海の水面より何百メートルとか低いそうだ。やがてガリレア湖が見えて來た。その湖面がマイナス二二メートルと貢つた地図に出てゐる。ティベリアスへ着いた。ここには温泉があるそうだが、そこへは案内されなかつた。古い砦の跡がある。そのあたりに松葉牡丹が美しく咲き乱れていた。見とれているとボーデンハイマーが「オウ・ヴォアチュール」とどなつて、早くバスへ戻れと促された。そこから少し南下してヨルダン河を渡る。橋の上でバスをちょっと止めてもらい、私を含む数人が写眞をとつた。このあたりのヨルダン河は巾が数メートルしかない。河を渡つて少し行つた所で引返し、ティベリアスで晝食。シンガーフ夫人と少し話したが夫人の英語は分りにくくて困つた。シンガーフ教授は今日は見えておらず、病気ときいていたので容態を尋ねると「ベター」という返事であつた。

二時半ごろティベリアスを出発、ガリレア湖に沿つて北西岸を進み、イタリアふうの教会が見下ろせる所で写眞をとつた。それからサフェド（*34）という町へ着いた。シナゴーグを見る。思わず帽子を脱いだら冠つていってくれと案内人に注意された。日本と反対らしい。帰りはもう疲れてしまつて途中のことは何も覚えていない。

六時ごろハイファへ帰着、エクスカーションはこれで終りである。ここからすぐ帰途に着く人もあるが、同じ宿に残る人もある。私はあとの組であつた。レー

モン教授、シンガー夫人、ディングル氏など前の組で、これらの人々に別れを告げた。ヴィリュウ夫人はバスの中から手を出し「メルシー、ムッシュ・カドー」と言つた。教授と夫人に岩波写眞文庫をあげたから、カドーとはそのことである。車が動き出してからも何時までも彼女はこっちを見ていた。エクスカーションの間にスザンヌ・ドウローム（*35）とも話をしたが、彼女ともここでさよならをした。

八月十五日 土曜

昨夜は疲れて早くねてしまった。今朝も七時までねた。今日はちょうど安息日で何もかも休みである。朝食後はがきを少し書いたほか床の上でうつらうつら過した。今日も晝食に電話で呼ばれた。午後は帰りの支度をしたほか休息。夕食後ローゼボーム、ベーデル、タトン夫妻、セルジエスク夫妻らに別れを告げる。セルジエスク夫妻とは一週間後パリで會う約束をした。

明朝早く立つので宿の勘定をすませておこうと思つたら一九ポンド何がしだと。予想したより多いので聞いてみると、十四日の晩はエクスカーション外だから、別に二泊したことになる。なるほど。イスラエルのポンドはうまく使い切るつもりで計算していたので支払いは足りなくなつた。ドルで払つてよいかとうとホテル・ザイオンにコングレシストのため銀行が出張しているという。タクシーを頼んでホテル・ザイオンへ行つて換金してもらつた。この宿に泊つた人が大勢たむろしていた。フォルグラフ教授、レーネル・ラヴァステイーヌ夫妻、マドマゼル・クールタン（*36）（クールタン女史というべきか、かなりの年輩である）など。マダム・ヴィリュウの姿も少し離れた所に見えたが、もう遅いからすぐ自分宿へ帰り、払いを済ませる。

八月十六日 日曜

頼んでおいた通り五時に起しに来た。早いから朝食はいらないと言つておいたが、フェルティッヒ、マハトだそうだ。この宿の使用人はドイツ語を使つてゐる。何とも行き届いたことで朝食をここですませることが出来た。六時少し前に迎えの車が来た。もう一人リッダの飛行場へ行く人がいるというので、ホテル・ザイオンへ寄つた。昨夜金を換えに行つたホテルだ。

同行者はドクター・ライテルであつた。車へ乗つてから君の名はライテルカリテルかと聞いたら、アメリカではライテルだが、ヨーロッパではリテルだと答え

た。それ以上尋ねることはしなかつたが、彼はドイツ系アメリカ人である。これからパリへ行くという。ムーヴィ・カメラをよく回していた人だ。写真をだいぶとつたろうと聞いたら四〇〇メートル位と答えた。家族が見たがるからだそうだ。アメリカの代表は四人でストラットンと誰とかと誰とかと自分だという。

さわやかな朝である。気温は何度くらいだろうと言つたら、彼は空氣を探るような格好をしてツワントイッヒと言つた。軍が全速力で走ると風が涼し過ぎるくらいである。途中ほとんど車にも人も逢わない。やがて左手の山から太陽が上つて来た。小さなセトルメントがたくさんある。カエサレアを通り、七時四〇分ごろテル・アヴィヴの町が見えて来た。間もなくリッダの空港についた。

少しばかり余つているイスラエル貨幣を処分するために、コングレスの記念切手を買い足したり、繪はがき古切手など買う。古切手の中に肖像のついたのがあるから、賣店のおばさんにこの人はワイツマンかと尋ねたら、そう前の大統領ですと答えた。そばで見ていたライテルが偉い人だという。それくらい知つている。彼はマドリド、ローマ、アテネのコースで来たという。アテネを見たのか、ハウ、ロングときいたら一日と答えた。

私はセルジエスクとパリで會う約束をしたが日までは定めていない。パリでは交通関係のストライキがあつて旅行者は難渋しているというニュースを耳にしている。それが片づいてからパリ入りをしたいものだ。そこでローマヒュネーヴで適当に日を過して情報をつかんでからフランスへ入ることにしよう。ローマ行の座席はコングレス事務所のフルトン氏に依頼してあつたので、アリタリアの受付へ行つて尋ねるトリザーブしてないと言う。そばにいた年輩の男がヤジマか、それなら電話を受けてある」と言いOKとなる。受付をすませるとイタリアの保険会社が保険をかけるとうるさい。もちろんことわつた。

ローマ行は一〇時の予定だつたが、一時間ばかり遅れた。ライテル君も同じ飛行機でローマまで行き、それからIWAへ乗り替えると言つていたが、座席が離れていたのでさよならを言う機会がなかつた。

シャロムという便利なる言葉一つおぼえユダヤの國をわが去らむとす

(* 37)

イスラエルで科学史の国際会議が開かれてから三十七年が経つた。あのじせ會つた学者たちの中には既に故人になつた人が少くない。もちろん健在の人もいるが、一度会つただけでその後の消息に接しない人もいる。そんな思いをじめて印象に残る人物に短い註をつけることにした。歴史上の人物も少し入る。やつ一つ思い出深いのは十字軍にゆかりの遺跡のこゝつかを見たことである。それで地図にも少し註をつけたのがあつ、十字軍に關係のないのも入つてゐるかも知れない。唯一つ、それらと異うのは最後に添えた歌の中にぐづづく語が出て來るのぢ、それに註したことである。

（一九九〇年八月）

（* 1） フョルグリフ Johan Adriaan Volgraf (1877-1965) ハーハタの数学者、ベルギーのかほの教授。一九三〇年から一九五〇年まで国際科学史アカデミー会員。

（* 2） サイフ Aydin Sayili (b. 1913) ハンカウ大学教授、科学史研究室主任。イスラムにおける天文観測に関する著書がある。

（* 3） セルジウスク Pierre Sergescu (1893-1954) ルーマニアの数学者。クルジ大学教授であったが第一次世界大戦の際にフランスへ移る。国際科学史アカデミーの常任幹事。本来の名は Petre であるが、フランスでせし記のよひにピール。「科学史研究」第三六号（一九五〇）へ短い追悼記事を出した。夫人は Maria Kastleraka でニコポーリハヌ田畠の作家である著 Legendes et Contes de Podlachie は「ピールの追悼」（古代波蘭土伝説、柳亮訳、昭森社、一九三九）として英訳された。

（* 4） カーネ George Sarton (1884-1956) ベルギーのかほ（ケホ）に生れる。数学者から科学史家となる。第一次大戦の際にアメリカに渡り同地で研究活動をおこなつた。

（* 5） ボーテンハイマー Frederick Simon Bodenheimer (1897-1959) ケルンに生れた昆虫学者。イスラエル建国後イヒルカーラのハーハタ大学動物学教授。日本へ来たことがあぬところ。一九五〇年から一九五六年まで国際科学史アカデミー会員。

（* 6） ハコアス・バラクロカ Jose Maria Millas Vallicrosa (1897-1970) スペインのバルセロナ大学でぐづづく語・ぐづづく文学教授。アラゴン科学、ぐづづく天文学の文献について詳しい研究がある。一九五六六年から一九五九年まで国際科学史アカデミー会員。

(* 7) ストーパルト H enry Ernest S chaplet on (1878- 1962) ハーツの化学学者で練金術史の研究家。

(* 8) アレクサンダー Alexandre Koyre (1892- 1965) ハリハスの哲学者、黒海沿岸のタガノログに生まれた。ガコルトに属する研究家の世がある。

(* 9) クロード・J・ヘベシ J·Hevesi ハマトの人の。ガコルトが前の関数と変数の起源について語った。

(* 10) タトゥ René Tatton (b. 1915) ハリハスの数学者。「クセジ文庫」に邦訳「算法の歴史」(小堀禪謙) がね。

(* 11) サムエル・サムバースキー Samuel Samburski (b. 1900) ハーツ生れ。ハリハス大学の物理学教授。

(* 12) マリエ・アンティネット・トネルat Marie-Antoinette Tonnelat (b. 1912) 女性はパリ大学物理学部物理学教授。相対論の研究がある。

(* 13) ピエール・ルイモア Antoinette Vireux-Reymond スウェーデン。後出アーノールド・コトローハ教授の娘女。ピエコトローハの娘。夫は地質学者。興味を持つてこもると語った。

(* 14) マウリス Maurice Daumas (b. 1910) パリ大学の哲学者。ル・マ・ガール・H・メル・H勤務。科学器機の歴史について著書がある。

(* 15) ピエスタベル Pierre Costabel (1912- 1989) パリのナントホールの僧。ガリレイの力学などの研究がね。ハムゼンヌヒコウ。

(* 16) ロンカ Vasco Ronchi 1897- ? ハムハムのトニナハニコ国日本学研究所所長。

(* 17) ハイシマ Chaim Weizmann (1874- 1952) ロハス生れの化学者でシナジム運動の指導者。ハーバード大学教授。初代大統領 (一九四九 - 一九五二) 。ハイシマン研究所は博士の進路に費されたところ。農薬化が中心課題の研究は見受けられた。

(* 18) ベルシハ Beer sheba ペサフ (Negave) 沙漠の北の場所に位置する。

(* 19) ニーダム Joseph Needham (b. 1900) ハサコスの生化学者。「中国の科学と文明」の著者。

(* 20) ベン・ヤフヤ Ben Yahi a ハリハスのアバヘル高等研究所。アラブ三十代と見受けられた。

(* 21) ハーベンクル Herbert Dingle (b. 1890) ロハス大学の哲学者教授。

(* 22) ヘルツル Theodor Herzl (1860- 1904) ハリハスのコダヤ人作家で、シナジム運動の推進者。

(* 23) ライバーンスキー Raymond Libansky (b. 1905) ハリハス生れで、モハリハスのマサクナール大学哲教授。

(* 24) ジネス Salomon Pines (b. 1908)° パリ生れ、クレルイ大学教授。アレルト科の研究者。今回エリーザベトにて述べた。

(* 25) ルード Arnould Raymond (1874-1958) ベルギー出身。博物館 Histoire des sciences exactes et naturelles dans l'Antiquité grecque et romaine (1925) 著者。

(* 26) エドワード (エドワード) Ramé (Ramé) 110-母ハバト画エリエドウハハのボーットハ一書に載れた。

(* 27) ローヤル Maria Rooseboom エルトハ科の博物館。顯微鏡の歴史の著書がある。

(* 28) カルカント Caesar ea エリエドウ-母ボーットハ一書に載れた。

(* 29) ラークス Acre + ハムのエリハク織がエリエドウ織に Sai nt-Jeand-Acre と書いたのエリエドウ織ねれたが、イスラエル Akko°

(* 30) エリスの梯子 Ladder of Tyre エルトハ梯子 Ras al - Naqura (エリエドウ) と云。レバノンセトエルトハ梯子使つて云。

(* 31) エリエドウの後パリで印したと云教科書の印刷せへロハだつたと云つた。

(* 32) フォーブス Robert James Forbes (1900-1973) 技術史の研究者。 (* 33) シュル I. Simon エリハ織 Histoire des Sciences (1, 503-516) <「母世くハムの織物」エリエドウ織を書いて云。

(* 34) カーハル Safed (Safad) エリエドウスから此處へ来ぬ途モエリハ Hattin (Hattin) の古戦場のあたりを通りたはずである。エリエドウハシノハシノハスを駆つた所である。

(* 35) シュルダル Suzanne Delorme 彼女は「ダカーナ・エリエドウの文通社たちと紳士」との発表をおこなつた。

(* 36) クールタン M Courtain 第二回で「物理的科学の教育における歴史的方法」について発表をおこなつた。エリエドウのセシラムノンのと云最後に云う人が謝辞を述べたが、スタハム・マイクロホンを握りふつたり身振りたつふつスピーチをしたのが田に浮かぶ。

(* 37) シヤロム 「今田は」や「やよな」や「いれどよ」。それから数日後パリの書店でイスラエルの案内書を書棚から取つておいたと云、エリエドウ「シヤロム」と云ふ瓶がつたので振り返つて見ると、エリエドウ黒い服ですぐ分るユダヤの人がいた。私は「シヤロム」と應する立場にせなこので黙つて云つたが、彼の言ひにでも云ふものだと云つた。

『ももんが』一九九一年五月号

朝あけて何やら人の声すれば日本語と思ふさにはあらずか

リッダ空港ホテル

ニキロメートル先はアラブの国にして小競合絶えずと運転手いふ

エルサレム途上

屋上に日本の旗もひらめける国際会議の事務所に着きぬ

エルサレム

遠く来しわれをねぎらひ迎へくるこの国人と言葉を交す

今日の午後市内見物がありますと言ふには行かずプログラムを読む

サートンの本はいくつか読みたれどこの日初めてその人に会ふ

諸人のつどへるなかに日本の学者のことをわれは語りぬ

ユダヤ娘いざ踊らむと言ひしかばアーバー・イヒ・カン・ニヒト・

タンツェン

国新しくみないきいきと砂漠にも水引きて人は嘗みをなせり

レセッブション

キブツ見学

AINシユタインはこの国人の血すぢなればその名負ひたる森の
ありける

地理書にて人も浮かぶと習ひたる死海は遠くかすみてゐたり

十日あまり会の終りは一泊二日ガリラヤ地方へバス旅行なりき
波低き地中海を見てたたずめば海がすきかとタトンは言ひぬ

ハイファ

松葉牡丹咲き乱れたる園あれば錯覚してここは日本かと思ふ

ティベリアス

望郷の思ひにしばしひたるときバスに戻れとボーデンハイマー
サラディンがフランク軍をやぶりたるヒツティン古戦場はこの近
くならむ

一九五三

八月十六日 日曜

午前十一時リッダを立ち、午後四時ローマ着。五時間かかったわけである。三年前泊まったことのあるアルベルゴ・ロマーノへ宿をとる。一休みしてからイタリア航空へ行つて、ジュネーヴ行の座席をきいたら、明日は満員、火曜のはチューリヒ経由だという。水曜日のジュネーヴ直行のを予約する。宿へ帰つてバスを使う。イスラエルではシャワーばかりだったので、久しぶりにいい気持になつた。宿でローマの案内書を買い、明日と明後日の見物日程を考える。

八月十七日 月曜

昨夜はよく眠つた。エール・フランスの両換所で三〇ドルをイタリアの金に換えてもらつたら、一八、二〇〇リラよこした。まずムゼオ・ナツィオナーレ・ロマーノへ行く。入場料二〇〇リラ、イタリア語のカタログ五〇〇。半球形日時計があつたので、カタログの余白へスケッチする。彫刻に現われた草履のはき方、車井戸などもスケッチした。十二時までゆっくりと見た。

三年前にピアツツィア・デル・エセドラで茶を呑んだのを思い出し、またそこへ行つてレモン・ティーを呑む。この前ほどうまくないような気がした。それからボボロ広場まで歩く。さらにテヴェレの河岸へ出て、その小公園で休む。セーヌ河岸にちょっと似ているが河幅は半分もないし、もちろん古本屋はいない。河水は緑色に濁つている。河岸を下流へ向つて少し歩く。河向うにパラツツオ・ディ・ジウスタツィア、カステル・サンタンジェロを望む。ヴァチカンのサン・ピエトロの丸屋根も望見できる。

ポンテ・アンジエロの近くでアメリカ人がおれの車に乘れ、としつこく勧めるから歩く方が好きなんだと言つて断つたら、理解できないという顔をしていた。もう一つ先のポンテ・ヴィットリオ・エマヌエルの所からコロ・ヴィットリオ・エマヌエルへ曲り、少し行つてから横丁へ入りピアツツィア・ナヴォナを見る。エジプトのピラミットがある。それからパンテオンへ入つて見た。パンテオンの前でお上りさんを目あてに案内記や万年筆などを売つていた。万年筆はひどい安物の感じで、いかにも貧しい國の光景と思われた。

こつちも小さな茶みせで一四〇リラのアイスクリームをなめているのだから、余り豊かとは言えない。

さらに歩いていたら郵便局があつたので、さつき小公園でやすんでいるとき書いた繪はがきを日本へ出す。航空便で一ハリラだつた。一〇八円くらいである。ヴィア・バルベリーニから噴水のあるピアツツア・バルベリーニへ出て、ヴィア・システムーを通り、ピアツツア・ディスパニアへ行く。段々がいくつもあつて、下りたところ通りの真中に船の形をした水盤がある。あたりに花屋が出ていて、花の香が漂つてゐる。ここでしばらく休んで六時ごろ宿へ帰る。

ムゼオ・ロマーノの裏庭に白い夾竹桃が咲いていた。フォロ・ロマーノのあたりには紅いのがたくさん咲いており、白いのもいくらか混じつていて。コロッセオの横のアルコ・ディ・コンスタンティーノに向ひ合つたあたりにもあつたのを思い出す。さつき書くのを忘れたが、パンテオンを見てから、フォロ・トライアーノだの、メルカティ・トライアーノだの、フォロ・オウギュストなどいうのを見た。それからコロッセオへ出て、アルコ・ディ・コンスタンティーノまで行つて引返したのだつた。それからスペイン広場の方へ行つたのである。

今朝この宿である大きな人が食堂へ入るとき、一枚しまつてゐる方のガラスの扉に額をぶつけてガチャガチャとガラスを割つてしまつた。怪我はしなかつたようだつた。高さ九尺くらい、幅一尺五寸くらいの一枚ガラスだから、何もないよう見えたのである。

八月十八日 火曜

ローマの町も三年前に比べるとだいぶきれいになつた。昨日はついに靴磨きの少年を一人も見かけなかつた。一日中歩き回つても靴がそんなにひどく挨でよがれることはなかつた。昨日町のキオスクに何とかツアイトウングというドイツ語の新聞があつたので買った。よく見ると「ノイエ・ツュルヘル・ツアイトונג」というスイスの新聞で、昨日買ったのが十六日のフェルンアウスガーベというのだつた。ギリシアに地震があつたそうだ。建物がこわれてゐる写真が出ていたから、相当のものであつたらしい。イオニア海の島である。フランスのストライキはまだ続いているそうだ。ロンドンのヴィクトリア駅にはフランス行きを見合わせるようにとの注意が書き出されている。旅行者がスーツケースに腰をかけて思案している写真が出てゐる。もう四五日もしたら片づくだろう。

九時に宿を出て、明日行かなくてはならないエア・ターミナルを確かめておく。ヴィア・ジオヴァンニ・ソオリッティ二六で停車場の近くである。スイス航空の所に誰もいなかつたが、アリタリアで予約を取つてあるから大丈夫だろう。今朝は場所を確かめに来たのである。

今日はムゼオ・アピトリーノへ行く。ガロ・モレンテはいい。トゲを抜く少年というのもよい。その他いい彫刻がたくさんある。十一時ごろそこを出て、コロッセオの横を通り、テルメ・ディ・カラカラまで歩く。一〇〇リラ出して中へ入つてみる。豪壮なものである。その中の汚ならしいレストランで七〇リラのオレンジ水を呑む。そこを出てヴィア・セバスティアーノを歩く。やがて昔のアピア街道へ出る。歩いている人はほとんどいない。ゆっくりと、いにしえのローマの道を歩きけるかな、などと思いながら歩いて、二時ごろサン・カリストというカタコンベの所へ出た。三時に見せるというので、木かげの石に腰をかけて待つ。三時になり見物人が二三十人たまつた所で案内人が出て来た。五〇リラ出して切符を買う。何処で習つたのかと思うような英語の説明がつく。四十五分くちいかかつて、ぐるぐると骸骨のころがつていてる所を引き回された。

さつきはここまで来るのにだいぶ歩いたと思ったが、帰りはバスに乗つたら十分くらいでコロッセオまで来てしまつた。またピアツツア・エセドラの茶店で茶を呑む。アメリカンという英語の新聞があつたので買う。パリのストライキについて政府側が就業するよう勧告しているが、労働側が反対している。これにもギリシアの地震のことが出ている。日本には水害があつたそうだ。京都の附近で百何人とか死者が出たとあるが、これは多過ぎる。何かの間違いであろう。茶店の向側に靴みがきがいたのでみがいてもらう。ハリラだという。小銭をつかみだしたら八五あつたのでそのまま渡した。

八月十九日 水曜

六時少し過ぎ起きる。八時にジオリッティ街のエア・ターミナルへ行くことになつてゐる。八時一〇分前にタクシーに乗る、距離はいくらもないが荷物があつたから。メーターに二三〇と出たから五〇〇リラの札を渡したら平然としてそのまま受取つてしまつた。釣銭があるだろう、というイタリア語が分からぬので黙つていた。飛行機は九時半の予定だつたが一時間くらいおくれて出発した。一番前の右の窓際の席だったので外がよく見える。地図をくれたのを見ると二ース回りであつた。小一時間で二ース着。ここで約三〇分とまつた。ここは海へ川が流れ込んでいるところが黄色く濁つてゐる。外は紺青の地中海である。二ースを

出て間もなくアルプス連峰が見えて来た。モン・ブランが見える。貰った地図を見るとラック・デュ・ブルジェの上を通り、エークス・レ・バンの町が眼下に見えた。かなたに見えるのはラック・ダンヌスイであろう。それからジュネーヴの湖水が見え、一時十分ごろコワントラン飛行場着、ジュネーヴの町から三キロの地点である。

空港で四〇ドル換えたら一六九・六スイス・フランを寄越した。案内所で中級のホテルをきいたらメトロポールというのを紹介してくれた。湖水の見える室をとる。一ハフランだから高くはない。スイス・フランは八五円である。一休みしてから町へ出てみる。さつき通つたポン・デュ・モン・ブランを渡り、リュイ・ドゥ・モン・ブランを少し行つた左側にモヴァード、ロンジンなどと書いた時計屋があつたので、ガラスの入替えを頼む。実はロンジンの時計のガラスにひびが入つたのは去年ごろであった。東京の時計屋へ行つたら、これはガラスの裏側にはつてあるセロハンにひびが入つたので、この部品は日本へ入つていない、といわれていたのである。明日の夕方できるという。

時計屋の向側を見るとクック旅行社がある。そばへ行つてみるとショー・ウインドーにシャモニー行のバスが毎日朝八時三〇分に出るとある。シャモニーの谷はチンドルの本でおなじみであり、『アルプスの氷河』を訳したという歴史があるので、申開きのためにもちょっと見ておきたい。一日おいて二十一日のシャモニーとメール・ドゥ・グラスの切符を買う。晝食券つきで三二フラン。バス・ポートを持つて行くこと、フランスのビザが必要だが、なければその場でやつてくれるそうである。

賣店にラ・トリビュン・ドゥ・ジュネーヴという新聞があつたので買って見る。パリのストライキはまだ続いている。ジャン・ジャック・ルソー島の茶店で茶を呑む。新聞を読んだり、繪はがきに日本への便りを書いたりする。宿へ帰つてしまらく休む。夕食は外ですることにしてレストラン・デュ・ノールという店へ入つたら、アムバサドール・デュ・ジャポンかときかれ。ノン。かなり上等の店らしい。料理はうまかったが、少々高かつた。

八月二十日 木曜

ローマでたくさん寝て来たせいか、昨夜はなかなか眠れなかつた。湖水の大噴水は夜はとめるらしい。窓が薄明るくなるのを見てまた眠る。時計がないのでよく分からぬが、七時ごろとおぼしきころ起きる。一服してから科学史会議通信

の第三報を便箋に三枚書く。稻沼君宛に送る通信はこれで終わりにする。書き終つて食堂へ行つたら八時二〇分だつた。九時ごろ部屋へ帰つて休んでいるとジャルダン・アングレーの噴水が出始めるのを見た。大噴水はまだ止まつてゐる。

まず郵便局を見つけて日本へ手紙を出す。明日メール・ドゥ・グ・ラスへ行くには運動靴がよいと思う。寺田先生の日記に氷河を見に行くとき靴の上へ靴下をはいて滑らない用心をしたことが書いてある。運動靴を買いに行つたら、サイズをきかれた。知らないと言つて足を出して笑われたが、格好なのを買つた。

ミュゼー・ラートというのを見ようとしたが閉まつてゐるので、シャルル・ガラン街にある美術と歴史の博物館というのに入る。繪の方は二フランでその他は無料である。まずその他を見る。ローマ時代の彫刻、中世の武具類、ギリシアの壺、その他石器・鉄器・ブロンズ・エジプトのパピルスなど。パピルスの中にブトレメウス時代の「葬礼」のパピルスがあつた。繪が入つて横に四・五枚続きである。そのほかミイラ、貨幣などいろいろの物がある。それらを見ていのうちに十二時近くなつたので繪の方は割愛して外へ出る。

町で「ラ・スイス」という新聞を買う。イランにクーデタが起り、モサデグ首相がいなくなつたそうだ。パリのストライキは依然として続いているが、スイス航空のパリ行は昨日出たそうだ。そろそろパリ行の予約をしてよさそうである。宿へ帰つてひるねをして三時ごろスイス航空へ行く。二十二日土曜日のパリ行の予約をする。

帰りに時計屋へ行つて時計を受取る。ガラスの入替えに三フランだ。店員はガラスのことをクリスタルと呼んでいた。それからケイ・デュ・モンブランへ行つてみる。その名に背かず正面にモンブランがよく見える。クック旅行社へ行つてシャモニーの地図をきいたら簡単な案内をくれた。向側のトウリスマに何かあるかも知れない、というから行つてみたが、やはりただで呉れる簡単なものしかなかつた。それから宿の前のジャルダン・アングレーを歩いて帰る。宿のあるあたりはグラン・ケイである。

昨夜行つたレストランは上等だったので、今日はもっと安そうな所を見つけて入つた。安いことは安かつたがサービスもわるく、水をくれと言つても、とうとう持つて来なかつた。

十時少し過ぎに雷が鳴った。窓から外を見たら大夕立だつた。珍らしい。稻光が走る。シルレルの「ウイルヘルム・テル」を想い出した。ドイツ語の教科書だつたからよく覚えているのである。雷が耳に入る前から、この美しい平和な國も昔は「ウイルヘルム・テル」に描かれているような事があつたのだと考えていた。その矢先に稻光がして雷が鳴つたのである。Es donner't, und....

八月二十一日 金曜

六時半に起きる。雲が多い、しかし降るほどではあるまい。七時半朝食。外を見ると薄日が射している。それからしばらくすると、日がかけり雲が動いている。レインコートを持つて行くことにする。

八時二〇分ごろクック旅行社の前へ行く。八時四五分ごろ出発。右側の前から二番目の窓側の座席である。ワインドウ・シートと指定して買ったのに、図々しい子供連れの男が席を取り替えてくれ、というから駄目だとことわる。一〇分くらい走ると、もうフランスとの國境だ、バスポートヘスタンプを押してもらう。フランスへ入つたのである。やがて雨が少し降つて來た。九時三五分ごろアルヴ河を渡る。白く濁つてゐる。チンダルの「アルプスの氷河」で読んだところによると、氷河の底の氷が岩から削り取つた岩石の細片で懸濁状態になっているのだという。道ばたに秋草が咲いている。ナデシコのようなのも見えた。何だか日本山の山路に似ている。林檎の木があつて小さい実が成つてゐる。その下に芝のような草が一面に生えている。牧場に草を食つてゐる牛が見える。九時五〇分ごろまたアルヴ河を渡つた。

九時五五分オテル・ナシオナルというのの前でとまつた。十五分休憩といふことで、便所へ行つたりそこらをぶらぶら歩く。一行の中にインド人が一人おり会釈した。東洋人のアミティエというものか。魚屋があつて二尺くらいの魚が並べてある。何という魚かきいたらヘラだという。そばの黒板に三つばかり品物の名が書いてあつて、その中にF E L A S というのがある、これだ。ここの中の町の名を運転手にきいたらクルーズだという。この遊覧バスには説明も何もつかず、運転手だけで連れて行くのだから至極簡単でよい。

ここを出てから鉄道線路を横切り、それからしばらく線路に平行に走つた。またアルヴ河を渡つた。あとで地図と対照するためアルヴ河を渡るのを以上で三回まで数えたが、あとは数えないことにした。一〇時四〇分ごろコル・デ・モネットという峠を越すとボッソン氷河が見えて來た。一一時一五分ごろシャモニーの

駅前へ着く。オテル・デ・ゼトランジエというのの前へバスがとまつた。ここは晝食所の一つになつてゐるが、まだ早いのですぐに駅へ行く。一時三〇分に発車するのがあつた。アプト式の登山鉄道で煙を吐く汽車である。沿道にモミと思われる木がある。サルオカセの下がつてゐるのもある。白樺もちらほら見える。雨が少し降つてゐる。四〇分でモンタンヴェルの終点へ着いた。

すぐにメール・ドゥ・グラスの方へ下りて行く。途中「アルプスの氷河」の口絵にある銅版画そつくりの光景が展回されている。写真をとる。十分ばかりで氷河の上へ出る。運動靴をはいて来たのは成功であつた。グロットへ行くのに切符を買え、と書いてある。スイスの金で七五セント払つて中へ入る。氷河の氷をくり抜いた洞窟で両側にガンのようなものがあつて人形などが置いてある。一番奥に椅子とテーブルの形を氷から彫り出したのが四つ五つある。入口の所で氷を見ると青味を帶びている。氷は粒状構造をしている。氷の壁からは水が滴り落ちていて寒い。急いで外へ出る。

氷河のクレバスやメール・ドゥ・グラスの全景など写真にうつす。十六枚全部写してモンタンベールの駅へ上がって來た。間もなく発車するところで乗ろうとすれば乗れたが、次にしてあたりの景色を眺める。レインコートを着ていても寒い。やがて下から汽車が上がって來た。それに乗り込む。窓からシャモニーの谷を眺める。その上には険しい山があつて瀧のように水が流れ落ちている。三時シャモニーの駅へ着いた。

駅前のレストランへ行つてクツクで買つた晝食券を出したら、もう遅いのでコンブリートのはできないがいいかという。いいと言うとパンとハムと紅茶を出した。自分にはこれくらいの方が結構である。メール・ドゥ・グラスを優先させたのだから仕方がない。シャモニーの村を歩い みたいが雨が降つてゐるので、このレストランでゆつくり休み、今日の見分をノートに書いたりする。それから小降りになつたので外を少し歩く。五時一〇分前にバスがやつて來た。五時ちょうどに出発。七時ちょうどにジュネーヴへ帰着。入浴。

今朝バスを待つとき買つたフランス・ソワールを読む。ストライキはまだ続いているそうだ。キンゼイの女性の性生活の報告が出たそうだ。それからソ連で水素爆弾の実験に成功した、云々。ちょっとホテルを出て、駅と反対側へ少し行つたカフェでビールを呑む。

一九五三

八月二十二日 土曜

六時ごろ眼がさめたが、また眠り七時ごろ起きる。昨夜はだいぶ涼しかった。毛糸のチョッキ着て外へ出た。今朝はいくらか雲あるが日が射している。よい天気になるかも知れない。雲は大体遠い山の方に、それもちぎれたのがあるだけだ。昼すぎまで宿についてコングレスの資料などを整理する。

二時少しすぎ宿を出てスイス航空へ行く。一五・一五の予定がだいぶ遅れて一六時近くになって出発した。ラック・ジュネーヴに別れを告げる。しばらくすると小さい山脈を越える。これがフランスとの国境である。やがて雲の中へ入り何も見えなくなつた。スチュワーデスが新聞を持って来たので、「フィガロ」を取つて読む。おやつが出た。みんな平らげた。

六時十五分前ごろブルジエの飛行場へ着いた。予告なしでオテル・スンニーへ行つたら、ドゥニーズという娘さんが覚えていて、アヴェック・バンか、トランクトかという。三年前三〇号室へ泊つたのだ。それが空いているのだ。ただし室代の方は五五〇フランが一〇〇〇フランに上つてている。アーム・チエアは張り替えてあつた。カーペットも余り上等ではないが、ともかく新しくなつていた。

バスを使ってから、レストラン・アラゴーへ行つたら満員だったので、前に行つたことのあるサン・マルセル街のレストランへ行く。食後オーステルリツツ橋まで歩いてノートル・ダムに再会する。東の方を見ると十三日か十四日の月が見える。三年前にパリへ着いたときも満月に近い月がこうこうと輝いていたのを思い出した。橋を渡り切つた処から引返して宿へ戻る。

八月二十三日日曜

このスンニーという安宿は三年前にエール・フランスで紹介してもらつたもので、気に入つているから再びやつて來たのである。老夫婦と娘でやつてているらしい。食事は出さないのだから風呂の湯をわかつくらいで、掃除には中年の婦人が時々来るようである。この前十数日滞在している間に老マダムがドゥニーズと呼

んでいたのは雇人ではなく娘であろうと思われた。もう若くはないが亭主らしい人は見かけなかつた。

日本を立つとき、ふくさを一枚ばかりカバンの中へ入れて來たので、そのうちの派手な方をドゥニーズに進呈した。ふくさの説明は面倒なので省略して、スカーフになるんぢやないかと言つて渡したら「メルシー。ア・ドゥマン」と言つて握手をした。老マダムにはイスラエルのエクスカーションで訪ねたナザレのエグリーズ・ダノンシアシオンの前庭にあるマリア様の像の写つてゐる絵はがきをドゥニーズに渡しておいた。

今朝は前に行つたことのあるゴブラン通りのカフェ・オ・ロワという店で食事をしようと思つて行つたら、この店はなくなつて当りの様子が少し変つてゐた。そこでオーステルリツツ駅前の、これも前に行つたことのある店でクロワッサンを食いカフェ・オ・レーを呑んだ。

それからセーヌ河を渡つて右岸を少し歩く。日曜でも店を開いてゐる古本屋がぽつぽつある。少しのぞいて見る。ポン・デュ・カルーセルからプラス・デュ・カルーセルの方へ出る。花壇が美しい。少し行くとオペラ座が見えて來た。それからオスマン通りからリュー・ドゥ・モーブースというのを少し歩くとサクレ・ワールが見えて來たのでそつちへ行く。

石の階段はだいぶ高い。道理で左の方にフニクラがあると書いてある。見ると登山電車式の乗物が動いてゐる。しかしそんな物に乗るほどのこともあるまい。階段を上りきつたところから町がよく見える。お堂の中へ入るのは止めた。近くにアフリカの展覧会があると書いてあつたが、それも興味がない。

石段を下りてクリツー街を右へ行く。やがてムーラン・ルージュの前へ出た。もう少し行つて斜めに交差するリュー・コーランクールを少し右へ行くとモンマルトルの墓地である。道から両側に立派な墓が見える。中を歩いている人はない。リュー・トゥ・メートルを少し行つた所で引返す。天逝した子供の墓には永遠の悲しみを表すため石の柱をポキリと折つた形のものがあると何かで読んだことがあるが、そういう墓があるのを見た。

河岸の方へ出ようと思つていい加減に歩いていたら、さつきと同じ道へ出てしまつた。プラス・デュ・カルーセルから河岸へ出る。今度はポン・デュ・カルー

セルを渡つて左岸を歩く。古本屋をのぞいて見る。モンゴルフィ工の版画は見当らない。重ねてあるのをめくつたらあるかも知れないが、今日はその気にならない。オーステルリツ橋まで来たら二時近くなつたので、カフェに入つてビールを呑む。そこでしばらく休む。バスが不足なので貨物自動車を代用バスにしたのが走つてゐる。荷物を下げる人をいる。今日はだいぶ涼しい。毛皮のえりまきをしている婦人もいる。オーバーを着てゐる男の人もいる。銃を持つてゐる兵士が所々に立つてゐる。ストライキを警戒してゐるのであらう。ビールは三年前にはコップ1杯たしか三十五フランだつたが、今日は五十フランだつた。六十フラン置いて出る。

今朝ゴブランの辻でル・ジュルナル・ディマンシユを買つ、二十フラン。エールフランスはいくらか飛んでゐるそうだ。十七時三〇分フランクフルト行が一機出でいる。

今日一つ発見した。番地が若くなる方へ歩いてゐると左側は偶数に定つてゐるのだ。昨日タクシーの運転手にブールバール・ポール・ロワイヤール四八番地オテル・サンニイへ頼むと言つて、ポール・ロワイヤール街へ入つたところで「ア・ゴーシュ」と言つたのは無駄だつたわけだ。四八番地なら左側に定つていたのだ。この日本人パリの番地の規則正しさを知らないな、と運転手君は思つたことである。

今日町で寒暖計を見たら二十三度だつた。一時ごろである。今夜はレストラン、アラゴーへ食事に行つたら人が变つてゐた。とても安かつた。白葡萄酒ドゥミ呑む。宿の近くの映画館にスタンダールの「赤と黒」がかかつてゐたので入つて見る。十一時終る。帰つてすぐ寝る。

八月二十四日 月曜

あけがた雨が降つてゐるような気配を感じながら浅い眠りをつづけていたが、七時ごろ起きてみると果して雨の降つた跡があつた。今はもう止んでいる。セルジエスク教授はもうイスラエルの学会から帰つたかどうか、手紙を書いてコブラン通りを横切つたリュー・ドゥ・レーヌ・ブランシユの郵便局で出す。イスラエルでボーデンハイマー教授にあげようと思つて持つていた別刷を渡しそこなつたので、ここから出すことになつた。印刷物は開封で六フランだつた。これは文字通り開封でなければいけないので、日本のように封じ目を少し切つて中が見えるようにしたのでは駄目である。封筒のふたになる部分を中へ折り込んだだけにし

ておくのである。局員が中味を出して論文別刷だけで手紙など入っていないことを確かめるのである。フランス国内の封書は一五フランだから開封はやすいぶんと安い。もつともこれは薄い論文一通だけの話である。日本宛の絵はがき航空六五フランだ。三年前は六〇フランだつたと思う。

アラゴー通りとブラン通りの交差点の近くで朝食をすませ、今日は日本大使館へ行つて手紙が来ていなかどうか確かめ、それからアテネとカイロへ渡る手続きをしようと思う。手紙というのは、日本を立つ前にドイツのアルテルト教授に手紙を出してお会いしたいからご都合いかがか、イスラエルの科学史会議事務所にてにご返事乞うと言つておいたのであるが、会議が終る日までに連絡がなかつたので、事務所の方へもし私宛の手紙が采たらパリの日本大使館へ回送を依頼しておいたのである。アルテルト氏に会いたいと思ったのは「国際科学史学会紀要」で同氏がドイツの科学史の学者の一人であることを知ったからである。またアテネとカイロの入国申請のことは、今度イスラエルの学会へ出張した帰りに科学史のゆかりの深い二つの古い都市を見ておきたいと思い、私費旅行を追加したのであるが、出発前に日本で手続きをする余裕がなかつたからである。

メトロでエトワールへ出て、アヴュニュ・オーシュ七番地へ行つてみるとグルーズの二四番地だという。学術会議事務局で作つてくれた在外公館住所は古いものだつた。アシェットの案内書に出ているのが正しかつたのだ。そこはトロカデロの少し先だから歩いて行かれる。

大使館へ行つたらフットボールの選手団がユーローへ行く査証の事で監督の人達が話し中で少々手間取つた。転送された郵便は来ていなかつた。ギリシアとエジプトの国名追加と両国大使館への口上書を貰う。用事がすんだので帰ろうとしたとき、何だかうらぶれた日本女性が入つて来るのと擦れちがつた。何か心配ごとでもありそうに見えたが私は軽くポン・ジュールを言った。また退去命令を受けた学生のことで困つてているという館員の話も耳にした。大使館も仲々仕事があるものだ。

今朝「フィガロ」を見たら雨があるので予報だったのでレーンコートを持参して良かつた。大使館を出たとき少し降つて來た。メトロに乗りサン・ミシェルで降りてコーヒーを呑んでいるうちに小降りになつた。プレス・ユニヴァエルシテールで本を少し買って宿へ帰る。ギリシアとエジプトの査証は明日貰いに行くことに、イスラエルのコングレスの記録を整理したり、さつき買って來た本を

見たりする。

レストラン・アラゴーは三年前は月曜が休みだったよう記憶していたが行つてみたら開いていた。夕食をすませて外へ出ると、空はすっかり晴れ上つて満月が輝いていた。

八月二十五日 火曜

七時半ごろ起きる。八時半ごろ昨日行つたカフェで朝食をすませ、メトロでエトワールまで行き、リュー・オーギュスト・バクリーのギリシア大使館で査証をもらう。エジプト大使館はアヴェニュー・ディエーナですぐ近くだ。これも簡単にすんだ。それでも十一時近くなつた。

エッフェル塔の方へ向つてぶらぶら歩いて行くとアヴェニュー・ドゥ・ラ・ブルドンヌという通りへ出た。三年前このあたりで傘を買ったのを思い出した。昨日雨に降られたのでパリでは雨傘を持っていた方が良さそうだ。前に入つた店はすぐ見つかつた。この前のはあとで家のものへスチールに遣つたら柄が良いと言つて喜ばれたが、今度は余り気に入つたのがない。しかし間に合わせのを一つ買う。九五〇 Franc だつた。

それからチュイルリー公園まで歩き、そこの茶店でサンドウイッチなどを食つて昼食をすませる。午後からユネスコ本部へ行く予定である。一九五〇年アムステルダムの科学史アカデミーの総会でコインブラのコルテザン氏に会つたのが切つかけでユネスコの協力委員になつてゐるので、本部のメトロー氏と何回も書面のやりとりをしている。この人に敬意を表するのと、イスラエルで声をかけられたモラーゼ教授もユネスコの役職にある人だ。この人はイスラエルから少し回り路をしてパリに帰ると言つていたから、まだ帰つてないかも知れない。

クレーベル街のユネスコ本部へ行つてメトローさんに面会したいというと、ヴァカンスだからセクレタールがお会いしますという。マドモワゼル・プロックという人の部屋へ行つて少し話していると、メトローちがいで私が会いたいのはギュイ・S・メトロー氏である。そこでその人の秘書に会つたら、スワイズへ行つてゐるという。持つて来た論文別刷とメッセージを秘書に托す。八月にパリで仕事をしているのは秘書と事務員だけだ。モラーゼ教授もアテネだそうだ。

シャンゼリゼーを歩いてグラン・パレとプティ・パレの間を通つて河岸へ

出る。ルーヴルの側を通り過ぎて少し行くとサマリテンという百貨店があつたので入つてみる。二階へ上つた所にバスケット・ベレーの買場がある。眺めていたら年増の店員がやつて来て、私の頭の寸法を見積つたらしく、一つ選んで私の頭の上へ載せて「ボン」、いかにもフランス的だと思った。六四〇フランだった。

サン・ミシェル街を歩いてちょっと横丁へ入つたらリュー・ゲイ・リュサックであつた。ルネ・タトンの家はこのあたりだ。もとより訪ねる予定も約束もない。アヴェニュー・ドゥ・ラ・モット・ピケーという所で石けん（六〇フラン）と封筒（三〇フラン）を買って宿へ帰る。

夕食はアラゴーへ行く。今日はもう八月二十五日だ、帰りのプランを立てなければならぬと思う。

八月二十六日 水曜

今日はコンセルヴァトアル・デ・ザール・エ・メティエを見ておこうと思って行つたら、一三・三〇一七・三〇開館となつていて、案内書を良く見れば開館時間も書いてあつただろうに、場所だけレピュブリクの一つ手前でメトロを降りればよいことだけ確かめて、時間のことは確かめなかつたのである。博物館の前が小公園になつていて、そこへ行つて地図を出して眺める。すると国立図書館が余り遠くないことが分かつた。中へ入る予定はないが前まで行つてみようと思う。レオミユル街を少し行つて、それに交差するリュー・リシュリューを左へ曲るとすぐビブリオテーク・ナショナルである。

入口の近くに売店があつて絵の複製ですばらしいのや種々のビグリオグラフィーがあるが目の毒だから直ぐ外へ出る。まだ十一時であるからシャンゼリゼーまで歩き、エール・フランスの事務所で九月一日のフランクフルト行をきいたら満員だという。そこで九月一日のを予約する。一六時までにアンヴァリドへ行くこと。

十二時になつたのでチュイルリ公園へ入り池の近くの茶店で休み、サツドウイツチを食う。一時十分ごろそこを立てコンコルドからメトロに乗り、オペラで乗り換えてアール・エ・メティエで降りる。三十フラン払つて博物館へ入る。案内書（一一〇フラン）を買う。三時半まで二時間かかつて見学する。疲れたので出る。宿へ帰つて案内書を見ると、だいぶ見落している。パスカルの計算器などは見なかつた。

今朝はよく晴れていたが昼近くなつて雲が濃くなつて來た。一時は降るかと思つたが降るには至らなかつた。夕方も雲が多い。「フィガロ」を見たらアカデミー・フランセーズのジョルジュ・デュアメールが「水素爆弾についての考察」というのを書いている。鉄道と郵便は平常通りになつた由。さつきシャンゼリゼーを歩いていたらマロンが落ちていたので二つばかり拾つて來た。もう落ちた実があるのでだ。

八月二十七日 木曜

八時ころ起きてみると小雨が降つた形跡があるが今は降つていない。ゴブランのル・カルダン・ブルーという店で朝食。宿へ帰つてイスラエルのコングレスの記録類の整理をする。室の掃除に来るお婆さんはこの前の人で、私を思い出して「二年前でしたか」と言つから、三年前だと答える。「私もだいぶ年をとりました」という。七年働いているそうだ。三年前にこの宿へ泊つたとき、私のフランス語がたどたどしいものだから、あなたはドイツ語を話すか」と言われたことがある。「ヤー、AINVISIHEEN」と答えたものの、ユンケルさんに習つたドイツ語はだいぶさびてしまつて、余り変りばえのしないものだつた。このお婆さんはドイツ軍の占領中にドイツ語を覚えたのであろうか。そういえば是も三年前のことだが、この近くの喫茶店でギャルソンがダンケ・シェーンと言つた記憶がある。折角覚えた、ドイツ語を「留学生」みたいな日本人に使ってみたのであろうか。

イスラエルで貰つた印刷物には種々のものがある。ワイツマン研究所やヘブライ大学のパンフレットを読んでいたら昼になつたので外へ出る。

オーステルリツ橋の側の店へ行つてジャンボンを食う。これは関東地方ではお葬式のことで、鉢やどらの音から來てゐるので縁起のわるい響きだが、少々細長いパンの腹に包丁を入れてハムを挟んだものだからサンドウイッチである。それにティーを呑んで一五〇フランだつた。一昨日テュイルリ公園の茶店で同じようなものを食つたときは、一六フランで「セルヴィス・コンプリ」だつた。たまにはそういう店があるが、簡単でよい。

宿へ帰つて今度はシオニズム運動とイスラエル建国の歴史を読み出したら五時になつてしまつた。疲れたので少し眠る。

今日はアラゴーが休みなので、夕食はサン・マルセルのレストランへ行く。これはアラゴーより少し高い。ポタージュとビフテキと白ぶどう酒ドゥミとカフ

エ・フィルトルで五三五フランだった。夜は早くねてしまった。